

【論文】

宮沢賢治と＜礼儀作法＞

—『どんぐりと山猫』をめぐって

秦野 一宏

1.

『どんぐりと山猫』は、「おかしなはがきが、ある土曜日の夕がた、一郎のうちにきました」という一文ではじまる。その「おかしな」葉書の文面はこうだ。

かねた一郎さま 九月十九日

あなたは、ごきげんよろしいほど、けっこです。

あした、めんどなさいばんしますから、おいで

んなさい。とびどぐもたないでくなさい。

山ねこ 拝

書いたのは山猫の馬車別当である。いかにも稚拙な文章であるが、ここにはなんともいえない滑稽味がある。「とびどぐもたないでくなさい」という一文など、幼児が書いたような純朴さが感じられる。「めんどな裁判」はまるで子どもの考えた奇態な遊びのようで、おそろしいはずの「飛び道具」も「とびどぐ」となると、なにか玩具のような微笑ましいものになる。標準語を使おうとしながら、つい方言が出てしまうところもおもしろい。ところが、終戦直後の国民学校初等科の国語教科書（第四学年下）では、この葉書の文章は次のような、じつに味気ないものに書き換えられたり。

かねたいちろうさま。 九月十九日

あなたは、ごきげんよろしいそうで、けっこうです。

あした、めんどなさい判をしますから、おいでなさい。とび道具を持たないでください。 やまねこ拝

どうだろう。まるで生徒の作文を先生が添削してできあがったサンプルのような文章ではないか。おそらく、国定国語教科書を作った先生方は、そのままでは子どもたちに悪影響を与えかねないと配慮して、原文に手を入れたのだろう。しかし、これではおかしい葉書の「おかしさ」は半減し、別のおかしさが生まれてしまう。「あのぶんしやうは、ずゐぶん下手だべ」と別当は一郎と会った時に言うが、どこが「下手」なのかわからなくなる。また、「とび道具をもたないでください」ときちんときける大人なら、「とび道具」とは何か、なぜそれを持ってくるはいけないのかと、補足の説明を加えるところだろう。それだけではない。この作品は島村輝の述べるように、「読む者の意識を「言葉」の問題に引きつけずにはいない」ものである<sup>2)</sup>はずなのに、改訂版の読者は、「言葉」に問題があることすら気づけない。というのも、山猫、別当、一郎など、登場人物たちの使うそれぞれの言葉の特異性、その差異が薄められてしまっているからだ。たとえば、山猫は一郎と出会った時にこんなふうにする。「めんだうなあらそひがおこつて、ちよつと裁判にこまりましたので、あなたのお考へを、うかがひたいとおもひましたのです」。山猫は、書面にあるような「めんどな」などと、う抜き言葉遣いなどしない。原作では、「山ねこ拝」の葉書を書いた馬車別当のおかしな言葉と、山猫の丁寧で流暢な言葉が巧みに対比されているのに、改訂版ではその差がぼやけてしまっている。

この国定教科書ではすべて<正しく、わかりやすいように>直されていた。しかしわかりやすくされればされるほど、読者はわからなくなる。葉書を受け取った翌日、一郎が見る山は、彼自身の興奮に合わせるように「うるうる」もりあがっているのだが、国定教科書版では、「きれいに」もりあがると書き換えられ、一郎の主観的な彩り、あるいは自然の側からの生き生きした応答は見事に切り捨てられている<sup>3)</sup>。葉書の言葉だけでなく、「見だべ」、「下手だべ」といった馬車別当の使う方言はすべて標準語に置き換えられる。これでは一郎が標準語で話すことの意味も吹っ飛ぶ。時には「おまへ」が「きみ」に置き換えられるなど、話者どうしの関係を示す人称表現の語感にまで踏み込んでくる。なにより重大な変更は、有名などんぐり

裁判の申し渡しをする場面だろう。山猫から、どんぐりたちの言い争いをどう裁けばいいのかと相談された一郎は、「このなかでいちばんばかで、めちやくちやで、まるでなつてゐないやうなのが、いちばんえらい」と言えればいいと進言するのだが、原文ではそこに「ぼくお説教できいたんです」という一郎自身の言葉が添えられていた。国定教科書版では、これは必要なしと見なしたのか、あっさり削り取られている。ここで大事なことは、説教を一郎が聞きかじったということである。聞きかじったことを伏せれば、まるで一郎自身が思いついたか、あえて自分が聞いたことを隠しているということになり、一郎の持ち前の天真爛漫さが微妙に損なわれてしまう。あるいは改訂者のつもりでは、原作をよりわかりやすく、品のよいものにしようとしただけかもしれない。しかし結果は重大で、児童の読みは独善的に誘導され、原作の意図は捻じ曲げられてしまうことになる。

誘導が疑われるのは教科書版の改訂者だけではない。現場で教える先生も、知らないうちに、同じように子どもたちの読みを＜善意で＞先導することがあったようだ。たとえば終戦直後、阿部サチ先生の行った『どんぐりと山猫』の授業を取り上げてみよう。先生は自身の参加した『どんぐりと山猫』の「研究座談会」で、自分が実践した授業の風景を次のように紹介している<sup>4)</sup>。

阿部先生はまず生徒にひと通り読ませてから、あれこれと感想を訊き、そのあとで、話の中で「どこがいちばん大切なところ」だったかをおもむろに尋ねる。すると一人の子どもが「このなかでいちばんばかで、めちやくちやで、まるでなつてゐないやうなのが、いちばんえらい」というところだと答える。生徒の答えに対し、阿部先生は満足し、自分も、「自分でえらいと思ふような人は本当にえらいんだ、本当にえらい人はほかからあまりえらそうにみえない人なんだ」と感想を述べる。

座談会に参加していた菊池暁輝はこの先生の話の聴き、「ほう、兎どもの方がかえつてよく観察してゐますね」と、子どもの能力の高さに感心している<sup>5)</sup>。しかし、いったい子どもはここで何を観察し、どんな能力を発揮しているのだろう。だれだって先生にほめられたいと考える。何より、先生がおもしろいところではなく、「いちばん大切なところ」を訊いていると

#### 4-宮沢賢治と<礼儀作法>-『どんぐりと山猫』をめぐって

ころがミソだ。「大切なところ」と言われると、多くの生徒は、先生が大切に思うところはどこだろうと考える。目端がきく子どもなら、先生の日頃の言動から推して、『どんぐりと山猫』のどの部分を取り上げれば正解かを即座に察知するだろう。

そもそもお説教を再話した一郎も、人は謙虚であるのがいいなどと、殊勝な気持ちを抱いていたわけではあるまい。「お説教」のありがたい言葉など、筋金入りの優等生でない限り、素直に受け入れられるものではない。

いったい子どもというものは、上からの「お説教」を聞くのが好きではない。そのことは賢治も十分に承知していた。『二十六夜』では、梟の坊さんが<ありがたい>お説教をしているのに、二疋の子どもの梟が、にらめっこしてふざけつづけ、母親をやきもきさせる場面が記されている。ただ「おとなしいいい子」である穂吉だけが、説教中、「ちっとまっすぐを向いて、枝にとまったまゝ、はじめからおしまひまで、しんとしてみ」る。梟と比較するのも妙だが、一郎はもちろん、穂吉のような「おとなしい」いい子ではない。山猫からの招待状を受け取ると、親にも内緒で、それを「そつと」かばんの中にしまい、喜びを抑えきれずにとんだりはねたりする。そんな頭のはしこい元氣いっぱいのがきんこが、大上段から慢心を諷めるような、辛気くさいお説教を本気で聴いているわけがない<sup>6)</sup>。彼が説教を記憶しているのは、えらいひとはえらくない、AはAでないというそのナンセンスなロジックが<おもしろかった>ためである。そこに「本当にえらい人は(…)えらそうにみえない人だ」という重い教訓を見出し、これこそが一郎の口を通して伝えたかった作者のメッセージだ、などと断じる根拠はどこにもない。

「既成の疲れた宗教や、道徳の残滓を色あせた仮面によつて純真な心意の所有者たちに欺き与へんとするものではない」と、賢治は『どんぐりと山猫』が収められた作品集『注文の多い料理店』の広告ちらしに書いた。その文意に照らし合わせれば、『どんぐりと山猫』で扱われる「お説教」は、「疲れた宗教」や「道徳の残滓」にかぶせられた「仮面」がいかに色あせたものであるかを示していることになろう。そう考えると、教育的指導という大義のもと、教訓や説教を押し隠しながら、大人の期待する<正しい



＞読みへと導く先生たちも、なにやら「色あせた仮面」をかぶっているように見えてくる。

## 2.

一郎という子どもは天真爛漫であると同時にしたたかで、その扱いは一筋縄ではいかない。なにより、一郎の全体像を把握するためには、その無意識的な心の動きを捕らえた細部を読みとることが不可欠である。

字はまるでへたで、墨もがさがさして指につくくらゐでした。けれどもも一郎はうれしくてうれしくてたまりませんでした。はがきをそつと学校のかばんにしまつて、うちぢうとんだりはねたりしました。／ね床にもぐつてからも、山猫のにやゑとした顔や、そのめんだうだといふ裁判のけしきなどを考へて、おそくまでねむりませんでした。

おそらく一郎は、手紙が運んできた異界、＜風と山猫＞のにおいに惹きつけられたのだ。『ボランの広場』の「わたくし」は、「この小学校の子供〔ファゼロたち〕はみんな上着も靴もなくて風や猫のことばかり考へてゐるんだ」と言うが、激しく吹く風や得体のしれない山猫はまさに子どもたちの心をわくわくさせるもので、この点では一郎もファゼロと変わるところはない。広告ちらしにも、「山猫拝と書いたをかしな葉書が着たので、こどもが山の風の中へ出かけて行くはなし」とある。ただ引っかかるのは、「けれども」という接続詞である。葉書の文章は稚拙だったし、字も「まるでへたで、墨もがさがさして指につくくらゐ」であつた。「けれども」一郎は喜びを禁じえない。つまりは、葉書が不備だらけのものであつたことは本来、否定すべきこと、うれしさを抑制するはずのものであつたことになる。この「けれども」は、一郎が内心、文章や書き方の不備や出来のよさを思いのほか、氣にかけていることを自ずと語っている。

ファゼロは学校には通っているが、勉強しているようすはない。その「柏の林」の中にある学校に通うのは、「野原のいろいろな子供ら」で、生徒たちは「木沓にかれくさをつめてはい□てゐたり本がなくてかはりに白樺

の皮を机の上にひろげて置いたり」している。貧しいファゼロたちの関心事はもう野原の「風や猫」に限られるのである。しかし一郎は違う。一郎たちには学校生活や勉強を中心に、考えなければならないことがたくさんあった。

「けれども」に先行する、文章の不備をあげつらう一節は、明らかに学びに励む学童の感覚で感じられたものである。一郎たちは、いつも字を上手に書きなさい、墨はちゃんとこすりなさいと、先生に指示され続けている。さらには、文章をきちんと書けるよう、日々練習をさせられている。圧力をかけてくるのは先生だけではない。大正7年に創刊された「赤い鳥」などでも見開きの頁に、その発行の「<sup>モットー</sup>標榜語」の一つとして「真個の作文の活例を教へる」ことがうたわれていた。教養を尊ぶ社会の機運の中で、子どもの指導者を任ずる者たちは、ここがいい、ここはまずいなどと、子どもたちの文章を評価していたのだろう。馬車別当の書くようなはちゃめちやな文章など、すでに触れた国定教科書の改訂者がそうであったように、教育の指導者なら誰もが手を入れたくなるだろう。子どもたちはいつも、そうした指導者たちの視線にさらされている。おそらく一郎もそのような視線をいつも感じていたのではないか。だから「けれども」なのだ。本来ならば、こんな下手な文章は、教養ある〈大人〉を目指す者として嫌悪をもって遠ざけなければならないのだ。そんなことは、頭では分かっている。しかし無性におもしろい。建前はどうかろうとも、それを読んで心の内から押し寄せてくる〈子ども〉の喜びを、一郎はどうしても押しとどめることができなかった。つまり、一郎には、逆方向に動く二重の考えがあるということになる。

一郎の二重の考えは大人への態度にも見られる。ファゼロにとって大人は、信用できない、ただそれだけの存在であるが（「あいつは人はいゝかい？」—「いゝよおとなだって云ふものはないよ」）、一郎のもつ大人像は違う。山猫からの葉書を「そつと」鞆にしまいこむ行為からも窺えるように、一郎も大人を信用していないが、しかしその一方で、一郎にとっての大人は、その仲間入りをしてみたくてたまらないある種、憧れを抱く存在でもあった。だから彼はしきりと大人ぶるのである。

『ボランの広場』では、「山羊はまだ居るかい」と、ファゼロから「ぶっくら棒に」言われた「わたくし」は、「あんまり子供がわたくしを見下げたやうなものの言いやうをするので少しむっと」する。ファゼロにとっては大人の礼儀作法などまるで無価値だが、背伸びして大人ぶろうとする一郎にとっては、礼儀作法はきちんと習得すべき、必須のテクニックである。彼は、相手によって話のスタイルを変えたり、礼儀正しい言葉を自在に操る大人の能力には無関心ではいられない。だからこそ、「～拝」などという大人びた、へりくだりの表現にも心惹かれる<sup>8)</sup>。彼には「風の中へ出かけて行」きたいという願望に加えて、学校で教わったちゃんとした標準語で、ちゃんとした(＝上下の関係を意識した)礼儀作法を実践してみたいという抑えがたい願望があった。

標準語で話すことは一郎にとって誇らしいことは疑いないが、しかしその標準語が学校外、わけても家ではどのように受け取られていたのか。なにより、標準語を話す一郎たちが置かれた村の現実を知っておく必要がある。

たとえば「村童スケッチ」の一つ、『十月の末』を見てみよう。この話の中の登場人物たちはもう大人も子どもも全員が方言で話す。その中で、嘉ッコの兄さんが、標準語で書かれた読本を音読するシーンがある。「松を火にたくゐろりのそばで／よるはよもやまはなしがはづむ／母が手ぎわのだいこんなます／これがいなかのとしこしざかな。第十三課……」。これを聴いていたおじいさんは、「なにしたど。大根なますだど。としこしざがなだど。あんまりけづな書物だな」と茶々を入れる。お父さんも、「なあにこの書物あ儉約教へだのだべも」と笑う。二人にからかわれた嘉ッコの兄さんは怒り、泣き出しそうになって、読本を鞆の中にしまう。標準語の練習と言え、『風の又三郎』では、五年生の嘉助が教室で、「二三四ひつかゝりながら先生に教へられて」、読本を読むシーンがある。彼が引つ掛かっているのは、なにより標準語になじんでいないからだだろう。

おそらく、嘉ッコの兄さんや一郎たちが意気揚々と標準語を話せる機会は、学校外ではほとんどなかったのではないか。『風の又三郎』を見ると、「お早うございます」といった挨拶や「気を付けい」という号令以外は、

子どもたちは学校内でもすべて方言で話している。あまり勉強好きでないらしい嘉助のような子どもはさておき、嘉ッコの兄さんや一郎が、習った標準語を実践的に話せる場を切望してもふしぎではない。

この願望が、一郎を迎え入れる異界と深く関係する。栗の木やきのこ、滝、りす、山猫の別当、山猫たちとの森での一郎の一連の出会いはいずれも、その願望を実現するレッスンの場所であったにちがいない。

レッスンには段階がある。実践的レッスンの手はじめは、栗の木たちが相手だ。

一郎は栗の木を見上げて、  
「栗の木、栗の木、やまねこがここを通らなかつたかい。」とききました。  
栗の木はちよつとしづかになつて、  
「やまねこなら、けさはやく、馬車でひがしの方へ飛んで行きましたよ。」  
と答へました。  
「東ならぼくのいく方だねえ、おかしいな、とにかくもつといつてみやう。栗の木ありがたう。」

標準語といっても、自分と相手のどちらもが同じような言葉で語るわけではない。栗の木だけでなく、栗鼠やきのこ、滝に話しかける時も、一郎はまったく同じ調子（標準語常体）で話しかける。すると、一郎が尋ねるどの相手も丁寧な標準語で答える（「やまねこがここを通らなかつたかい」―「馬車でひがしの方へ飛んで行きましたよ」等々）。栗の木たちは、山猫の配下にあるわけではないから、山猫に敬語を使う必要がない。ただ一郎はどうやら、自分を彼らにとって年の差の近い年長者と見做している。このような設定の中で、相手と上手に標準語で会話するとなれば、どのような言葉遣いをしなければならないか。一郎にとって、その答えは難しくなかった。「おい、きのこ」とか「おいおい、笛ふき」などと無遠慮に呼びかけ、「きのこ、ありがたう」、「ふえふき、ありがたう」と締め括れば、それでいい。

人間である馬車別当との会話になると、難易度はずっと高くなる。初対

面の見知らぬ大人と話す時には、長幼の序を考慮して、栗の木や栗鼠では必要のなかった礼儀作法も守らなくてはならない。加えて別当はびっくりするような異形の姿をしていて、「気味が悪」く、しかも、方言を話す。心はひるみそうになるが、一郎は気を落ちつけ巧みに言葉を選びながら慎重に会話を押し進める。

### 3.

「あなたは山猫をしりませんか」。これが馬車別当に対する最初の言葉である。あえて「あなた」という言葉を使ったこの質問形の文章は、まるで文章読本のような人工的な雰囲気をもっている。おそらく予想される答えは、はい、わたしは山猫を知っています。もうすぐ戻ると思います、ぐらゐのところだろう。ところが別当の言葉は、まったく予想に反したものであった。別当は、一郎が問いかけると、横眼でこちらの顔を見て、口をまげてにやっとわらって言う。「山ねこさまはいますぐに、こゝに戻つてお出やるよ。おまへは一郎さんだな」。

いらっしゃる、お出でになるではなく、「お出やるよ」という柔らかみのある方言は、「あなたは山猫をしりませんか」という問いかけがいかに無味乾燥で、そっけのないものであるかを浮彫りにする。さらに、「山ねこさま」と「一郎さん」、別当の使うこの呼称表現の差別化も意味深い。「一郎さん」と丁寧に呼びながら、「あなた」でも「きみ」でもなく、「おまへ」を使うのは一見、アンバランスのように見える（「あなたは一郎さんですね」とは決して言わない）。前述の国定教科書では例のごとく、まず「お出やるよ」を「おいでになるよ」と方言を標準語に直し、さらには老婆心からか、「きみは、いちろうさんだな」と、わざわざ「あなた」を「きみ」に置き換えている。「きみ」という言葉で目下の者への呼びかけを品よく言い表したつもりなのだろう。しかし、それでは原文の柔らかみのあるニュアンスはまったく伝わらない。というのも、ここでの「おまへ」は目下の者をことさらに意識したものではなく、「一郎さん」という言葉と結びついてある種の親しみを醸し出しているからだ。一見すると、標準語を話せない別当の無教養さを揶揄しているように見えるかもしれないが、別の視点からする

と、感情のこもった言葉の息吹が伝わってくる。つまり、ここには言葉を量る基準が二つあるのだ。一つは言葉が作法に適っているかないか、もう一つは、言葉が生きているかないか。

『ボランの広場』に登場する山猫の馬車別当は、ファゼロと風の精霊・又三郎といっしょに手をつないでぐるぐるまわり、歌って跳ね歩く。彼は「ぢいさん」でありながら、子どもなのだ。『どんぐりと山猫』の別当も、どうやら、姿は大人でも、心は子どもと変わらない。しかも、彼は自分の中の<子ども>を一郎のように隠せない。隠そうとしてもすぐにぼろがでる。だからとえばいいのか、別当の生きた言葉の中には、一郎の言葉以上に、あるいは一郎の言葉と対照的に、子どもたちの生きた感情が映し出されている。

「あのぶんしやうは、ずみぶん下手だべ。」と男は下をむいてかなしさうに言ひました。一郎はきのどくになつて、

「さあ、なかなか、ぶんしやうがうまいやうでしたよ。」

と言ひますと、男はよろこんで、息をはあはあして、耳のあたりまでまつ赤になり、きものゝえりをひろげて、風をからだに入れながら、

「あの字もなかなかうまいか。」ときゝました。一郎は、おもはず笑ひだしながら、へんじしました。

「うまいですね。五年生だつてあのくらゐには書けないでせう。」

すると男は、急にまたいやな顔をしました。

「五年生つていふのは、尋常五年生だべ。」その声が、あんまり力なくあはれに聞えましたので、一郎はあわてゝ言ひました。

「いゝえ、大学校の五年生ですよ。」

すると、男はまたよろこんで、まるで、顔ぢう口のやうにして、にたにたにたにた笑つて叫びました。

「あのはがきはわしが書いたのだよ。」

一郎はおかしいのをこらえて、

「ぜんたいあなたはなにですか。」とたづねますと、男は急にまじめになつて、

「わしは山ねこさまの馬車別当だよ。」と言ひました。

別当は「あのぶんしやうは、ずいぶん下手だべ。」と「下をむいてかなしさうに」言う。すると一郎は「きのどくになつて」、「さあ、なかなか、ぶんしやうがうまいやうでしたよ」と慰める。まるで先生と生徒の会話であるが、ただ、ほんとうの先生なら、いくら慰めるといっても、「大学の五年生」と同じくらい字がうまいなどと、突拍子もないお世辞は言わない。

ここでの二人の立場は逆転していて、別当は大人でありながら子どもで、一郎は子どもでありながら大人である。愉快的あべこべ世界のナンセンスだ。ただ、こうしたナンセンスを受けつけない評者もいる。たとえば、米村みゆきはここに、学校教育を受けている者（一郎、ひいては作者）の学校教育を受けなかった者（別当）に対する優越感を感じとった。米村によれば、作者である賢治は、「社会的な負の記号をもつ人物」を「見せ物」に仕立てあげたことになる。『尋常小学校修身書』（大正7年）には、勉強に励み「リッパナ」人になった者と、勉強を怠け「アハレナ」人となった者の絵解きが載っていたが、賢治もそれに乗っかって「アハレナ」人を嘲っているというのだ<sup>10</sup>。

おそらく米村は一郎の笑いを誤解している。一郎はたしかに「おもはず笑ひだしながら」、返事したり、「おかしいのをこらへて」尋ねたりしているが、これは嘲笑ではなく、子どもが背伸びして大人ぶり、先生ぶることから来る笑いで、一郎先生に笑われる者の中には結果的に、小学生である一郎自身も含まれているのだ。そうなると、彼は自分で自分を笑っていることにもなる。褒めてもらった別当はうれしくて、「まるで、顔ぢゆう口のやうにして、にたにたにたにたに笑つて叫」ぶ。笑い方は別物でも、こちらが本来、一郎たち（生徒たち）に割り振られたいつもの笑いである。

賢治の世界では、「リッパ」と「アハレ」の間に境界線はない。賢治は、勉強に励むと「リッパナ」人になり、勉強を怠けると「アハレナ」人となるという、明治以降一般化してきた、知識人と大衆を上下の関係に置く安易な図式に与しない。『グスコーブドリの伝記』の山師は見るからに非常識で、理に合わないことばかりしているおかしい男であるが、この無教養

な男は同時に、ブドリの面倒を見、彼の将来のことを誰よりも気にかけてくれたやさしい心根の持ち主であった。彼は勉強せずとも、ある意味、「リッパナ」人間なのである。賢治がなにより警戒にしているのは、立派な者、成功者、あるいは選ばれた者の側に立って、人間を上と下に分類しようとする指導者たちの意識である。落伍者になりたくなければ、自分たちの言うとおりにすればいいと、先生たちは硬直した言葉で子どもの心を包囲する。子ども側から言えば、権威を付された上からの言葉が御託宣か何かのように下りてくる。賢治はそうないかめしい、硬直した言葉を、笑いのるつぼの中になげこんでゆく。実際、一郎は、聞きかじった説教をこう伝えているのだ。「このなかでいちばんばかで、めちやくちやで、まるでなつてゐないやうなのが、いちばんえらい」。物語の中でほとんど唯一と言っていいぐらい、一郎は素顔をさらけだして、自身の言葉で語っている。周知の通り、内容のよく似た説教はあちこちにある。たとえば聖書では—「あなたたちすべての中で最も小さい者、その者が大いなる者だ<sup>11)</sup>」。これはすでに触れた阿部サチ先生の言葉とよく似ているが、それらを一郎の言葉と較べてほしい。聖書でも阿部先生の言葉でも、人間にはえらい者とえらいでない者がいることは、暗黙の了解となっている。しかし一郎の子どもっぽい表現に移し替えられると、「ばか」と「えらい」者を分けようとする境界線が消されているだけでなく、境界線を引く行為そのものが笑われることになる。これはもう、鹿爪らしく人間を二分割する考えそのものの陽気なパロディーである。

こんな陽気なパロディーを仕掛ける賢治が、無条件に、勉強して「リッパナ」人になることを推奨するだろうか。知識への礼讃など、どこにもない。感情が生きいきし、豊かであるのは「リッパナ」裁判官、山猫ではなく、「リッパ」であることに憧れを感じながらも、まったく「リッパ」ではない別当の方だ。

他からどのように評価されるかを気にやむ別当の姿は、できのわるい児童と二重写しになる。いや、評価でがんじがらめにされているのはできの悪い児童だけではない。おそらくできのよさそうな一郎だって、文章の良し悪しを気にしているのだ。ただ、中野新治のように、一郎は「価値づけ



られることの意味も悲哀もすでに十分に知っている」と言い切ることは若干のためらいがある<sup>12)</sup>。なぜなら、たとえ「知っている」としても、それは無意識なものであるからだ。別当はいわば、子どもたちが意識化できない無意識の世界を映しだす鏡なのである。我々が別当において見出すのは、デフォルメされた一郎たちの姿である。

むろん、何でもデフォルメできるわけではない。山猫に服従しつづけなければならない別当だからこそ、抑圧された子どもたちの息苦しさを赤裸々に語らせることができる。作品集『注文の多い料理店』の広告ちらしの『どんぐりと山猫』に関わる部分には、「必ず比較をされなければならないいまの学童たちの内奥からの反響です」という一節がある。これまで、このちらしの言葉はたいいてい、どんぐり裁判と結び付けられてきたが、大きかったり、とがっていたりしていることがえらいのだと主張するどんぐりたちをいかに透かして見ても、「比較されて」悩んでいる学童たちの姿は見えてこない。学童たちが比較されていると感じるのは別のことだ。たとえば学童たちの関心を引く比較は、字がきれいだとか、文章が上手だとか、そっちの方面であろう。そしてそれらの比較の問題はなにより、別当において見出せる。谷川雁は「馬車別当がただの従者でなく、ある意味で全局面の主導者である<sup>13)</sup>」と、含蓄のある指摘しているが、「全局面の主導者」となることができるのは、別当が子どもたちの純朴さと抑圧された思いを兼ね備えてもっているからだ。

繰り返すが、一郎が「きのどくになつ」たのは、相手を上から見下ろしていたからではない。それはむしろ、自分も同じであるという告白に近い。馬車別当を「きのどく」に感じるその思いに、賢治が解説するような、比較を強いられる「いまの学童たち」の「内奥からの反響」があるのではないだろうか。無意識的なもの、「内奥」を別当を通して表現するのは、まさに賢治の方法なのだ。

一郎はあべこべ遊びの中で、自分のいつもの立ち位置を変える。先生、説教者、判事と、現実には自分たちを指導する、あるいは権威あるとされている人たちになりかわる。読者は一郎の愉快ななりかわりを通じて、そのナンセンスを笑いながら、同時に、一郎たちの置かれている、比較され

なければならない学校生活を異化した眼で見ることができるのだ。

4.

馬車別当の次に一郎の前に立ちはだかるのは山猫だ。裁判長である山猫の言葉遣いは別当のものとはまったく異なって、まるで先生の利用する指導書にあるような礼儀正しいものである。

まず、山ねこが「ぴよこつと」おじぎをすると、一郎は鷹揚に挨拶を返す。「いや、こんにちは、きのふははがきをありがたう」。すると、山猫はひげをぴんとひっぱって、腹をつき出して攻め込んでくる。「こんにちは、よくいらつしやいました。じつはおととひから、めんだうなあらそひがおこつて、ちよつと裁判にこまりましたので、あなたのお考へを、うかがひたいとおもひましたのです。まあ、ゆつくり、おやすみください。ぢき、どんぐりどもがまゐりませう。どうもまい年、この裁判でくるしみます」。—「お考へ」、「いらつしやいました」という相手への尊敬を込めた言葉、「うかがひたい」という謙譲語、同じ謙譲を示すのでも「どんぐりども」が「まゐ」るなどというまわりくどい、へりくだった言い方は、とても一郎にはまねのできない表現であろう。一郎の反応は伝えられていないが、この流麗な言葉遣いに内心、舌を巻いていたのではないか。ただこうした言葉遣いは、丁寧語を駆使した難しい標準会話のサンプルにすぎず、別当の用いたような生きた言葉はどこにもない。

一郎も、相手の礼儀正しさに負けじと、せいっぱい大人ぶる。まるで、文章読本を手本に、互いに礼儀正しさを競い合っているようだ。一郎は、山猫から葉書もらって「うちぢうとんだりはねたり」していたにもかかわらず、大人と接する時はまるで人が変わったように、いかにも大人びた言葉遣いをする。そんな礼儀正しい一郎はどこかしら、『紫紺染について』に登場する山男に似ている。すたれていた紫紺染の製法、染め方を知りたがっていた町の人々は、山男ならよく知っているだろうと考え、彼を西洋軒に招いて話を訊くことにした。人々は山男を荒々しい、粗野な男だと思い描いていたが、やってきたのはじつに紳士風な男であった。—「山男もしづかにおじぎを返しながら／「いやこんにちは。お招きにあづかりまし

て大へん恐縮です。」と云ひました。みんなは山男があんまり紳士風で立派なのですっかり愕ろいてしまいました」。しかしこの不思議には種明かしがある。山男が紳士風で立派に見えたのは、前日、彼が『知って □ 置くべき日常の作法』という本を買って、その教えのとおりにしてきたからである。

一郎はもちろん、山男のように作法書などは読んでいなかっただろうが、知っておくべき礼儀作法は、おそらく学校で十分に指導されていたにちがいない。ただ、同じように招かれた客なのに、一郎は山男のように「お招きにあづかりまして大へん恐縮です」などと、へりくだった挨拶はしない。一郎は内心は違っているかもしれないが、表面的には明らかに横柄である。実際、山猫も馬車別当もともに大人であるのに、一郎は山猫に対しては、栗の木や栗鼠に呼びかける調子で、「はがきをありがたう」と言う。なんと馬車別当よりもざっくばらんな話し方をしているのだ（ちなみに山猫は、一郎の助言に対して「ありがたうございました」と言う）。こうした一郎の微妙な言葉遣いの違いから原口佳子は、一郎にとっては、「別当が山猫より上に位置するようになっている」と指摘している<sup>14)</sup>。たしかにその通りではあるが、ただ一郎は、山猫より別当の方がえらいと感じているわけではない。ふつうの大人であれば、別当の使った「山ねこさま」という敬意表現から、山猫と別当が主従関係にあることを知ると、山猫に対しても別当に対するのと同じくらいか、それ以上に丁寧な言い方をしようとするだろう。しかし、一郎は大人ぶってはいるが、まだ小学校 4、5 年の子どもである。子どもの一郎は杓子定規に、同じ大人でも、礼儀上、初対面の見知らぬ人と招待してくれた相手を区別するのが当然だと考えている。招待する側とされる側では、招待された者のほうがえらいのだから、遠慮してはいけないというわけだ。山猫の言葉が立派な標準会話のサンプルであれば、一郎の言葉も、子どもなりに礼儀を理解した立派な会話のサンプルなのだ。

山猫の方も、一郎がそれなりの礼儀を心得ていることを認め、お招きした側として客人を立て、丁寧な返事をするが、ただ相手は招待客であると同時に、年端のいかぬ子どもでもある。子ども扱いすることも忘れない。山猫は、わざと煙草をすすめ、一郎が断ると、「山ねこはおほやうにわらつて、

／「ふゝん、まだお若いから、」と言ひながら、マツチをしゆつと擦つて、わざと顔をしかめて、青いけむりをふうと吐く。山猫からすれば、一郎は立てるべき客人であるが、同時に年端のいかない子どもでもあるわけで、長幼の序をわきまえてもらわなければ困るといったところか。—こうした二人のやりとりを見ていると、どうやら杓子定規の作法そのものが異化され、笑われていることがわかる。ゴーゴリが「プリリーチエ приличие [作法に適っていること、ちゃんとしていること]」と呼んで笑いのめした＜礼儀作法＞が思い起こされる<sup>15)</sup>。またトルストイやドストエフスキイが、上流社会にはびこる型にはまった、中身のないうわべばかりの作法を「コムイルフォー comme il faut [礼儀作法。申し分なく、立派であること]」という言葉で批判していたことも<sup>16)</sup>。それらは賢治の言葉でいえば、「疲れた宗教」や「道徳の残滓」にかぶせられた「仮面」ということになる。

このプリリーチエやコムイルフォーは、すでに触れた『十月の末』の、嘉ッコの兄さんの読本にも通じるものだ。「(…)母が手ぎわのだいこんなます／これがいなかのとしこしじかな」。「だいこんなます」の年越しに満足するような農村など、ありはしない。安藤恭子は、嘉ッコの兄さんが読んでいた読本が明治43年から大正7年まで使用された尋常小学校読本であり、そこに採録されていた「みなかの四季」の一節を兄さんが読んでいること、さらにはその「みなかの四季」に描き出された一家団欒のなごやかな風景が、当時の農村の状況とかけ離れた虚構のものであることを指摘している<sup>17)</sup>が（おそらくはこの読本の虚構性と標準語が重なり合うところに、『十月の末』という作品のおもしろさがあるのだろう）。プリリーチエもコムイルフォーもまさに、嘉ッコの兄さんの読本のように、巧妙に飾り立て、現実のもつ歪みを隠してしまう虚構（仮面）なのである。

一郎はこの虚構を楽しんでいる。一郎が「暗い坂道」と通ってやってきた山猫の本拠地は、「立派なオリーヴいろのかやの木のもり」に囲まれている。この「立派な」かやの森は、りすたちのいた場所とは違って、招待客として立派に振る舞えるかどうか試される真剣な遊びの場である。

「立派な」かやの森に、威厳に満ちた立派な山猫が現れる。やってきた山猫はまず別当のおじぎで迎えらる。—「そのとき、風がどうと吹いて

きて、草はいちめん波だち、別当は、急にていねいなおぢぎをしました」。山猫と一郎の出会いもおぢぎではじまる。「山ねこはぴよこつとおぢぎをしました。一郎もていねいに挨拶しました」。この山猫の支配する世界のモットーは、コムイルフォーを守ることのようだ。そのシンボルとなるのは「ていねいな」おぢぎである。

翻って、裁きの対象となっているどんぐりたちを見ると、どうやら彼らも、修身の教科書で謳われているような、「リップナ」人になることを期待されている子どもたちである。ただこの子どもたちは、現実の子どもたちと同じように、なかなか大人の思いどおりにはならない。

「裁判ももう今日で三日目だぞ、いゝ加減になかなほりをしたらどうだ。」山ねこが、すこし心配さうに、それでもむりに威張つて言ひますと、どんぐりどもは口々に叫びました。

「いえいえ、だめです、なんといつたつて頭のとがつてるのがいちばんえらいんです。そしてわたしがいちばんとがつてゐます。」

「いゝえ、ちがひます。まるいのがえらいのです。いちばんまるいのはわたしです。」

「大きなことだよ。大きなのがいちばんえらいんだよ。わたしがいちばん大きいからわたしがえらいんだよ。」

「さうでないよ。わたしのはうがよほど大きいと、きのふも判事さんがおつしやつたぢやないか。」

「だめだい、そんなこと。せいの高いのだよ。せいの高いことなんだよ。」

「押しつこのえらいひとだよ。押しつこをしてきめるんだよ。」もうみんな、がやがやがやがや言つて、なにがなんだか、まるで蜂の巣をつゝついたやうで、わけがわからなくなりました。そこでやまねこが叫びました。

「やかましい。こゝをなんとこゝろえる。しづまれ、しづまれ。」

別当がむちをひゆうぱちつとならしましたのでどんぐりどもは、やっとしづまりました。

どんぐりたちは、いかにも幼い。実際、「押しっこをしてきめる」などというほほえましい発想は、もう一郎にもないだろう。「押しっこ」が強いことを自慢するのは、「必ず比較をされなければならないいまの学童たちの内奥からの反響」などとは無縁のことである。ここでの「押しっこ」は、文章や字がうまいかへたかと別レベルの問題を扱っている。

誰がえらいか。どんぐりたちはみな、えらい者であると認めてもらいたがっている。しかし何ともおかしいのは、この場で、だれよりも、えらいと認められたがっているのが、ほかならぬ山猫だということである。「こゝをなんどこゝろえる。しづまれ、しづまれ」。まるで『水戸黄門』や『大岡越前』のような時代劇に出て来るような仰々しいせりふは、俺がいちばんえらいんだと、大見得を切って宣告しているかのようだ。

「えらい」と言えば、賢治自身もまた、えらい人に憧れていた時期があった。大正 8 年に書いた「手紙 (一)」には、もう悪いことはすまいと誓いを立てた龍が、自分の身を小さな虫に食べさせ、結果、天上に転生し、「世界でいちばんえらい人」、お釈迦様になってみんなに「一番のしあはせ」を与える話が記されている。賢治はこれを活版印刷し、周囲の者たちに配布した。なんらかの良き影響が得られると考えたのだろう。しかしこれはあくまで大正 8 年の賢治の考えであり、『どんぐりと山猫』を書いている賢治は、こんなえらい人を称揚する露骨な説教話で人の心を捕らえることができるなどとは、もう信じてはいまい。たとえ一郎がこの「手紙 (一)」を読んだとしても、感銘を受けるとはとても思えない。そこにはロジックのおもしろさもないのだから。

誰が「えらい」か。よく似た主題は同時代の童話でも取り上げられている。例えば大正 7 年の有島生馬作『大将の子と巡査の子』(「赤い鳥」10月号)では、大将の子の武雄と巡査の子の丑松が、どちらの父親がえらいかで言い争う物語である。大将は父がたくさん勲章をもっているからえらいが、巡査は、会う人たちはみなこわがっておじぎをするからえらい。どんぐり裁判ふうにいえば、勲章をもっている者がえらいのか、誰からも恐がられお辞儀される者がえらいのか、判決やいかんということになる。二人は、それぞれ自身の父親に尋ねるが決着がつかず、結局、先生に答え

を仰ぐ。すると先生は、武雄と丑松それぞれに、大将と巡査ではどちらがえらいとは決められないが、ただ、自分のたった一人の父親がその子にとってはいちばんえらいのだと教えた。その後先生は「修身」の授業でこの問題を一般化して、誰がえらいのかと言えば、自分を一番「可愛がつて」くれ、また自分が「かはいゝ」と思える人が、その者にとっていちばんえらいのだとみんなに説明する。要は、えらいというのは感じ方であって、一人ひとり、その人によってえらい人は違うのだということであろう。同時代の童謡詩人金子みすゞは、「みんなちがつて、みんないい」（「私と小鳥と鈴と」）と書き記したが、それをもじって言えば、みんなえらくて、みんないいということになろうか。

誰がえらいかと争っていた武雄と丑松も先生の説明に納得し、その後は大将がえらいか、巡査がえらいかというような「馬鹿げた言ひ争」はもう一切やめ、ますます「仲よし」の友達になったという。甘ったるいハッピーエンドである。しかし、先生に対する生徒の反論などはありませんと確信したようなこの終り方は、なにかしら膾炙くさいし、ある種のぶきみさを感じさせもする。『どんぐりと山猫』と『大将の子と巡査の子』。よく似た話だが、二つの話はまるで発想、方向が違うのだ。有島の物語は、いわゆる修身の授業で語られるような、お仕着せがましい説教話そのものである。一方、賢治の作品は、説教とは似ても似つかぬものである。賢治は、ありふれた説教と戯れながら、上から目線のしたり顔を笑う。

語る調子を別にすれば、たしかに一郎の助言は、武雄たちの先生の出した答えと似ているところがある。しかし、どんぐりたちは、誰がえらいかと言い争うが、彼らの言うえらさとは大将や巡査といったたぐいの権威的なものではなく、結局、個としての独自性である。自己を意識し、自己の尊厳を自覚したどんぐりたちの愉快なく我ありである。一郎が山猫に伝えたのも、愉快なお説教で、もし一郎がそれをふつうに自身の言葉でどんぐりたちに直接伝えたのであれば、みんな笑いこそすれ、静まり返ったりはしなかつただろう。ただ、山猫が一郎の言葉を重くした。

「よろしい。しずかにしろ。申しわたした。このなかで、いちばんえら

くなくて、ばかで、めちやくちやで、てんでなつていなくて、あたまのつぶれたやうなやつが、いちばんえらいのだ。」／どんぐりは、しいんとしてしまいました。それはそれはしいんとして、堅まつてしまいました。

原口佳子は、山猫は、「一郎のことばをさらに大げさに言った」だけだと述べている<sup>18)</sup>が、ただ「大げさに言った」というのでは言葉が足りない。「ばかで、めちやくちやで、まるでなつてゐないやうなの」がえらいと一郎は言ったが、こんな抽象的な言い方では、自身の姿かたちの特徴や押しっこの強さを基準にえらさを測ろうとするどんぐりたちには、大きな影響力をもたなかったにちがいない。これだけなら、幼い者にとって単におもしろいナンセンスにすぎないからだ。山猫が、それを意味あるものにした。萬田務が指摘するように、「あたまのつぶれたやうなやつ」が強調されることで、山猫の言葉は一挙にどんぐりたちに即したものとなる<sup>19)</sup>。ただ萬田は、この言葉の効力が一時的なものだと考えた。頭の潰れたのはいまここにいないだけで、きっと見つかるというわけだ<sup>20)</sup>。しかし事は、見つかる見つからないの話ではないだろう。どんぐりたちが問題にしているのは身体の強さ、かっこよさ、大きさといった外的指標にはかならない。みんな自分はえらいんだと言いたい、そのためには自分は、「あたまのつぶれたやうなやつ」だと認めなければならない。かっこ悪さとえらさはどんぐりたちにあつては相容れないものだ。いくらえらくなりたくとも、自分のかっこ悪さは認められない。なぜなら、それを認めることは、大きかったり、とがっていたり、押しっこが強かったりするという自身のかっこよさ（＝アイデンティティ）を否定することであるからだ。この否定は重大である。それは生きるために必須の＜我欲＞の否定につながる。

とはいえ、それがただの山猫の言葉というだけでは、どんぐりたちも言葉を奪われることはなかっただろう。問題は、裁判では裁判長の「申しわたし」には絶対に従わなければならないという厳粛なルールにある。一昨日、昨日とどんぐりたちが騒いでいることができたのは、「判事さん」がどんぐりたちの個々の言い分に左右されて、申しわたしにまで至らなかったためだ。こうして、山猫の言い換えと申しわたしという権威づけによって、



一郎の愉快的ナンセンスは、どんぐりたちの我欲を消してしまうほどの深刻なものになる。

この山猫裁判長の申しわたしにはなにかしら、世の先生や親たちの願望が投影されているかのようだ。うるさくせず、「いいんとして、堅まつて」いれば、それだけで先生や親たちは安心する。『二十六夜』でやんちゃな梟の子どもたちに、お母さんはこんなふうに嘆いていた。「ほんたうにお前たちったら仕方ないねえ。みなさんの見ていらっしゃる処でもうすぐきっと喧嘩するんだもの。なぜ穂吉ちゃんのやうに、ちうとおとなしくしてゐないんだらうねえ」。

じっと、おとなしくさせることが、山猫の最大の仕事だ。たしかに別当が脅しの鞭をならすとどんぐりたちはしばらくは静まるが、これは山猫が裁判でめざした「なかなかほり」ではない。暴力ぬきで、自発的に静まりきること、一これこそが、山猫が裁判でめざした「なかなかほり」だった。この言葉そのものには本来、悪い響きはないはずだが、山猫流の「なかなかほり」には、何かしらぶきみなものが含意されている。しかし、一郎はこのぶきみさには気づかない。

一郎は一意識はしていなかったが—ごっこ遊びを満喫するために山猫の待つかやの森に来了。「めんどな」裁判を解決することは一郎にとって、面白そうな遊び以外の何ものでもなかった。遊びが終われば、ああ、おもしろかったで終わる。一郎にとってどんぐり裁判はまさに愉快的裁判ごっこでしかない。智恵を提供し、裁判ごっこを楽しんだあとのどんぐりはもはや、役割を終えたもので、その後どうなるかは知ったことではない。このように遊ぶ一郎の眼を中心に据え付けると、どんぐり裁判の話は、愉快的ナンセンス・テールになる。裁判後に大好きな「黄金の」どんぐりたちをお土産にもらってもふしぎではない。多くの子どもの読者たちはこのおかしさを大いに楽しむだろう。しかし、どんぐりたちはそれぞれが自身の<我>をもち、自己を主張していた。みんな生きていたのだ。その生きたどんぐりたちが、先生や親たちの期待を背負ったかのような山猫裁判長の申しわたしによって、言葉を奪われ、一挙にモノになってしまった。その点にこだわると、魔法だ、ナンセンスだと笑っているわけにはいかない。ナ

ンセンスの中に意味を読みとる、これが大人の読みである。

しかし大人の読みにも問題は残る。えらさにこだわっていたどんぐりたちは、えらいという価値を否定されて堅まってしまったが、同じように自身のえらさにこだわっている山猫は、えらさを裁いたにもかかわらず、自分のえらさを何らとがめることはないのだから。何かがおかしい。

どうやら、この「おかしい」物語では二通りのえらさが取り上げられているのだ。若いどんぐりたちの自慢するえらさと、大人の山猫のこだわるえらさを混同するからおかしくなる。山猫にとってのえらさとはまさに權威を誇示できることであった。それは『大将の子と巡査の子』の武雄たちが問題にしていたような、勲章をもっていたり、誰からも恐れられおじぎされたりするえらさである。このえらさは、どんぐりたちの言う<えらさ>はまるで違う。どんぐりたちがえらそうに自慢しているとしても、それは慢心として批判するにはあたらない。彼らがぴかぴか輝いていたのは、慢心のせいではなく、エネルギーに自己の能力を主張していたからである。<えらさ>を発揮し、突出しようとする、—それは生きている証でもある。山猫はこのどんぐりたちの<えらさ>を、裁判長としての自身のえらさによって圧殺してしまった。問題はこの二つのえらさの関係にある。

## 5.

一郎にとってどんぐり裁判が、裁判ごっこであったように、山猫にとってもこの裁判はある種の遊びである。中野新治は、この裁判の遊戯性に触れ、それは「形式的な身ぶりには力が入っていても、判決自体は少しも主体的なものではないことにも明らかである<sup>20)</sup>」と述べている。的確な指摘だと思うが、わたしはあえて、山猫の裁判の遊戯性は、「判決自体は少しも主体的なものではない」にもかかわらず、「形式的な身ぶり」には妙に力が入っているところにあると、その強調点をずらしてみたい。

山猫にとって重要なことは、ただもう威厳を見せつけること、それだけだが、その威厳とやらがどうにもうさんくさい。この点で彼は『外套』（ゴーゴリ）の登場人物である有力な人物に似ている。この人物は最近有力に

なったばかりなので、部下にどう振る舞っていいかわからず、有力な人物に見えるように、鏡の前で練習している。万年9等官のアカーキイは強奪された外套を取り戻してくれるよう、この有力な人物のところへ必死の思いで訴えにきたのだが、有力な人物は傍に友人がいたため、友人の目を意識して、アカーキイを練習どおりに叱責した。その「当然の叱責」は予期以上の「効果」があった。アカーキイは卒倒し、床に臥して、ついには死んでしまうのである。この有力な人物の叱責は、どんぐりたちへの山猫の申しわたしと似ていなくもない。有力な人物が有力者ごっこをしているように、山猫は判事ごっこをしているのだ。

山猫にとって裁判は、観客を前にした一種の舞台である。仰々しい黒い長い襦子を着ると、もう彼は裁判官になり切っている。「いかにも気取つて、襦子のきものの胸を開いて、黄いろの陣羽織をちよつと出してどんぐりどもに申しわたしました」、等々。一つひとつの細かな仕草がいかにもわざとらしい。「裁判ももう今日で三日目だぞ、いゝ加減になかなかほりをしたらどうだ」と、山猫は、「すこし心配さうに、それでもむりに威張つて」言う。有力な人物は、アカーキイの急死を知って「良心の呵責」を覚える。この人物の「良心」はじつに薄っぺらなものだが、それでも彼は冷血漢ではなかった。同じように山猫も根っから非情というわけではないのだろう。ただ、心配している素振りを見られると、威厳に傷がつくのではないかという思いに付きまといわれているのだ。

裁判がうまく終了すれば、「山猫は、黒い襦子の服をぬいで、額の汗をぬぐひながら、一郎の手をと」るが、おそらく顔は笑っていない。山猫が自然な笑いを浮かべることはないだろう。一方、別当はもう「大よろこびで、五六ぺん、鞭をひゆうぱちつ、ひゆうぱちつ、ひゆうひゆうぱちつと鳴らす。山猫がこんなふうに、体中で喜びを表現することなどありえない。生命力にあふれ、あるがままに生きる別当と、上っ面だけの威厳がすべてで、しなやかな感情に乏しい山猫。この裁判終了の場面では、二人の姿が見事なコントラストをなしている。

山猫の威厳が無内容であることは、彼の使う＜格調高い＞言葉からも窺うことができる。たとえば裁判終了時、彼は一郎相手に、突然、「じんかく」

という言葉を使う。―「いゝえ、お礼はどうかとつてください。わたしのじんかくにかゝりますから」。人格という言葉の堅苦しさ、「じんかく」という表記のやわらかさが対照的でおもしろい。この対照性は何を意味するのか。『よだかの星』では、鷹がこの言葉を使うが、ちゃんと「人格」というように漢字になっているのに（「お前とおれでは、よっぽど人格がちがふんだよ」）、どうしてここはひらがなになるのか。この「じんかく」という表記はおそらく、一郎が、自分の耳に入ってきたくじ・ん・か・く>という言葉の意味がよくわからないこと、漢字に変換できないことを示している。

山猫もまた、この人格という言葉の真意を理解しているとは到底思えない。山猫はお礼をすると言うが、彼には「お礼」の気持ちが欠けている。「じんかく」云々は、お世話になった人へは礼を返す義務があるということを行っているらしいのだが、あえて、大正教養主義のヒューマニスティックな香りが漂う「じんかく」などというこむずかしい流行語を持ち出して、相手をひるませ、自身の紳士としての教養の高さを示そうとしているのである。彼の頭の中では、「じんかく」は自身にだけ関わることである。だから彼は、煙草がほしくて「なみだをぼろぼろこぼ」している別当の姿を横眼で見ながら、そしらぬ顔で、気持ちよさそうに煙を吐きつづけ、声もかけないでいることができるのだ。どんぐりたちの仲を取り持とうとする殊勝な心をもっているように見えるが、そのじつ、彼らの身になって何かを考えてやっているわけではない。

「(…) そこで今日のお礼ですが、あなたは黄金<sup>きん</sup>のどんぐり一升と、塩鮭のあたまと、どつちをおすきですか。」

「黄金のどんぐりがすきです。」

山猫は、鮭の頭でなくて、まあよかつたといふやうに、口早に馬車別当に云ひました。

「どんぐりを一升早くもつてこい。一升にたりなかつたら、めつきのどんぐりもまげてこい。はやく。」

別当は、さつきのどんぐりをますに入れて、はかつて叫びました。

「ちやうど一升あります。」

山ねこの陣羽織が風にばたばた鳴りました。そこで山ねこは、大きく延びあがつて、めをつぶつて、半分あくびをしながら言ひました。

「よし、はやく馬車のしたくをしろ。」

「さつきのどんぐり」とは、赤いズボンをはいた、三百でもきかないほどのどんぐり、大声で自己を主張し、最後に「申しわたし」を受けたどんぐりである。建前では、この生きたどんぐりたちも「じんかく」を尊重されなければならないはずだ。人格を尊重していればこそ、裁判という真実をめざす制度が利用されたのだから。ここではこの生きたどんぐりたちが、徹底的にモノ扱いされる。生きているどんぐりと死んだ魚の頭とを並べられ、お礼の選択の対象となっていること自体、どんぐりが一挙にモノ化されていることを示している。さらにはこのどんぐりは、お礼用のモノとして一升と計量化される。少し前までは、三百人以上のズボンをはいたどんぐりたちがいたのだが、今は一升のどんぐりが枡の中にあるだけだ。

「どんぐりを一升早くもつてこい。一升にたりなかつたら、めつきのどんぐりもまぜてこい」という言葉からは、山猫が何にこだわっているのかが、はっきりと見えてくる。彼にとって大事なものは、黄金のどんぐりを一升あげると約束した自分の言葉であり、ひいては約束を守る紳士という「リッパナ」自己像である。どんぐりは一升きっかり、すべて黄金色という言葉さえ守られれば、内実など、どうでもいい。たとえめつきでも、黄金色をしていさえすればいい。沽券を保つこと、コムイルフォーが山猫にとってのすべてなのだ。

ドストエフスキイは『伯父様の夢』の語り手に、マリア・アレクサンドロヴナが、その「非のうちどころのないコムイルフォーの能力」を活かして、「ほんの一言で恋敵を打ち砕き、八つ裂きにし、殲滅する」ところを目撃したと語らせている<sup>22)</sup>が、山猫もマリア・アレクサンドロヴナのように、どこまでも大人のコムイルフォーで、一郎を攻め落とそうとする。

山猫はまず、名誉判事になってください、葉書が行ったらこれから来

てくださいと相手に依頼し、それに一郎が応じると、次には、「これからは、葉書にかねた一郎どのと書いて、こちらを裁判所としますが、ようございますか」と了承を求める。見ようによっては、些事にこだわっているように見えるが、この形式的な細部にこそ、彼の全存在がかかっているのだ。大枠の書式の提案に色好い返事を得た山猫は、ついに本丸に攻め込む。

やまねこはまだなにか言ひたさうに、しばらくひげをひねつて、眼をぱちぱちさせてゐましたが、たうたう決心したらしく言ひ出しました。

「それから、はがきの文句ですが、これからは、用事これありに付き、明日出頭すべしめうにちと書いてどうでせう。」

「ようございますか」という丁寧語からさらに踏み込んで、「どうでせう」という、相手の考えを尊重するより慇懃な言い方で同意を求める。しかし一郎は「わらつて」提案を斥けた。「さあ、なんだか変ですね。そいつだけはやめた方がいゝでせう」と。「用事これありに付き、明日出頭すべし」はまさに出頭命令であつて、もし、この命令を許せば、一郎は招待客という役割を放棄しなければならない。いくら形だけ名誉判事にしてもらつても、これでは、実質は被告人扱いである。一郎からすれば、いくら礼儀作法に則った申し出であつても、そんな、自分を下に置くようなごっこ遊びはヘンとしか思えない。だから彼は招待客という役を押し通し、毅然とした態度で拒否したのだ。

とはいえ、一郎がコムイルフォーの闘いで山猫に勝利したわけではない。山猫は裁判において、お説教で聞いたという一郎の言葉を巧みに利用した。子どもの一郎には、申しわたしが、どんぐりたちの主張（＝自己肯定）を消し去ることの意味が分からなかったとはいえ、結果的に、生命否定の判決に加担させられたのである。そのことを意識させるかのように、最後の場面は生氣がない。

馬車が進むにしたがつて、どんぐりはだんだん光がうすくなつて、まもなく馬車がとまつたときは、あたりまへの茶いろのどんぐりに変つて

みました。そして、山ねこの黄いろな陣羽織も、別当も、きのこの馬車も、一度に見えなくなつて、一郎はじぶんのうちの前に、どんぐりを入れたますを持つて立つてみました。

山猫や別当、きのこの馬車とともに、柁も消えたということになれば、この物語は一郎の白昼夢のようなものになる。しかし手渡された柁は手にしたままで、中にはもらったどんぐりがはいっている。異界へはたしかに行つたのだ。問題は、このどんぐりがもはや黄金色に輝かないというところにある。

歩くことができ、喧しくおしゃべりをする事ができる黄金のどんぐり、同じ黄金色をしているが、まったくモノと化し、贈答品となったどんぐり、そしてその黄金色のどんぐりは、最終的にあたりまえの茶色のどんぐりになる。このどんぐりの変化とともに、一郎と山猫の関係も大きく変わる。

変わる徴候はすでに別れ際にもあった。山猫は、「大きく延びあがつて、めをつぶって、半分あくびをしながら」、馬車の支度をしろと言うが、この気のない命令はどうだろう。その後、「さあ、おうちへお送りいたしませう」と言葉をかけられ、馬車に乗せられた一郎だが、以後、山猫は「とぼけたかおつきで、遠くをみ」ているだけで、以後は何も話さないし、一郎も関心がないのか、モノと化した黄金のどんぐりをぼんやり見つづけ、山猫に話しかけることはない。沈黙が馬車の中を支配する。出会いの時は、じつに丁寧な挨拶を交わしていたのに、別れには互いに一言の挨拶もない。ありがとうもなければ、ごきげんようもない。ごっこ遊びは終わったのだから、もうお世辞や社交辞令はけっこうということか。ならば普通の会話をすればいいと思うが、どうやら二人の間では、お世辞や社交辞令ぬきのざっくばらんな会話ができないらしい。別れはまったく名残惜しいものではない。一どんぐりたちが黄金色を失ってゆくのと軌を一にして、一郎の心は、ますますはずまなくなっていく。物語の結末も何かしら、祭りのあとのようにわびしい。

それからあと、山ねこ拝といふはがきは、もうきませんでした。やつ

ぱり、出頭すべしと書いてもいゝと言へばよかつたと、一郎はときどき思ふのです。

一見すると、「出頭すべし」という山猫の葉書の文句を一郎が断ったから葉書は来なくなったように見える。しかしこれでは、山猫は嘘つきになって、たとえ見せかけだけであっても、言葉を大切に、「じんかく」を誇る裁判官としてのこれまでの山猫像は崩れてしまう。そもそも一郎が山猫におもねって、「出頭すべしと書いてもいゝ」と返事していれば、はたして山猫からの葉書は来たのだろうか。

なによりおかしいのは一郎の視点を共有した語り手が、<山猫からの葉書>でも<裁判所からの葉書>でもなく、「山ねこ拝といふはがき」が来なかったと伝えていることである。ふしぎがることではない。そんな葉書は来るはずはないのだ。なぜなら「山ねこ拝」とは書かずに「裁判所より」にするという取り決めを一郎は承認したのだから。ではなぜ、語り手は今さら「山ねこ拝といふ」葉書にこだわるのだろう。

こうは考えられないか。山猫は自身の言葉を守って、「かねた一郎どの」、「裁判所より」と記された葉書を律儀に出しているのだが、ただのお役所式の紋切り型では、たとえ出頭すべしと書かれてなくとも、一郎は葉書を見ることはできない。事は一郎の無意識に係わっている。「出頭すべしと書いてもいゝと言へばよかつた」と一郎は反省する。しかしその反省はあくまで頭、理性による後知恵である。一郎に届けられる異界からの葉書は、それを待ち受ける一郎の無意識的な強い期待があつてはじめて、現実のかたちとなるのではないか。言い換えると、別当の書いた「山ねこ拝」という葉書の強烈な「おかしさ」によって、山が「うるうる」もりあがるような異界への扉が開かれたのである。

もちろん「やまねこ拝」と書かれているだけではだめだ。国定教科書にあったような、大人の教育的配慮の行き届いた文面であっても、一郎に届くことはないだろう。「おいでなさい」は、「出頭すべし」よりはまだましとはいえ、命令的な調子がかけらも残らない「おいでんさい」ほどの魅力がない。「とび道具を持たないでください」ときちんと書かれていたら、何



かよからぬことがあるのではないかと、腰が引けてしまう。そんな物騒な手紙は届かない。

異界から帰還した一郎は大人に成長したのだとよく言われるが、これは違う。一郎は、別当のいる愉快的異界と断ち切れたわけではない。『雪渡り』の狐たちは、11歳以下の子どもたちを幻燈会に招き入れることはないが、作者がこだわっているのは年齢ではない。問題なのは、11歳以下の子どもに通じるやわらかな心の有無である。賢治世界では、コムイルフォーに取り込まれていなければ、大人でも野原にある狐の小学校を参観できるし（『茨海小学校』）、聞こえないはずの鹿たちの言葉も聞こえてくる（『鹿踊りのはじまり』）。熊とだって腹を割って話せる（『なめとこ山の熊』）。

一郎がもし山猫のコムイルフォーに負けて、「出頭すべしと書いてもいゝ」と、心と裏腹のことを山猫に言えたとすれば（その嘘は自分を裏切るもので、字がうまいと、別当を煽るためについたお愛想の嘘とは質が違う）、あるいは彼も、ほんとうに、礼儀作法を権威の発揚と結びつける「卑怯な成人たち」の一人になってしまったのかもしれない。しかし一郎は大人ぶってはいたが、けっして大人になりきらず、彼の礼儀作法はどこまでもごっこ遊びでありつづけた。そんな一郎であれば、「おいでんさい」と呼びかける異界からのおかしな招待状がまだどこかから来るかもしれない。その可能性は大いにある。

## 注

- 1) 「四学年 下」1948年、1月。ここでの引用は、海後宗臣編『日本教科書大系 近代編第九巻 国語（六）』講談社、1964年、所収の復刻版による（221頁）。
- 2) 島村輝「言葉・欲望・権力―「どんぐりと山猫」から「注文の多い料理店」へ」『近文学研究』第5号、1998年8月、101頁。
- 3) 恩田逸夫は、「うるうる」には「山の生き生きしたエネルギー」が感じられるのに「きれいに」では、その「力強さ」がまったく消滅してしまうと指摘している（『宮沢賢治論3 童話研究・その他』東京書籍、1981年、83頁）。
- 4) 「「どんぐりと山猫」の研究座談会」（続橋達雄編『注文の多い料理店』研究Ⅱ、學藝書林、1975年、所収）、10頁。初出は『農民芸術』第4集（1947年9月）。
- 5) 同上。
- 6) 『ひのきとひなげし』初期形（大正10年頃）では、ひのきの説教をきいたあと、ひ

なぜしたちは「みな、しいん」としているだけだが、最終形（昭和6～8年頃）では、「おせっかいの せい高ひのき」と反発する。説教というものに対する賢治の見方が時とともに変わったのである。その変化がいつ起こったのかは確定できないが、『どんぐりと山猫』を発表する大正13年にはすでに、説教めいた言葉の効果に期待を寄せていなかったことは疑いない。

- 7) ここでの傍点による強調は作者のもので、下線による強調は筆者のもの。以下、強調は傍点、下線にかかわらず、すべて筆者のもの。
- 8) 米田利昭が指摘するように、ここには「大人の使う言葉が自分にさし向けられた喜び」もある（「『山ねこ 拝』の読み—賢治と言葉—」（『日本文学』35巻10号、1986年10月、81頁）。
- 9) 海後宗臣編『日本教科書大系 近代編第九巻 国語（六）』、223頁。
- 10) 米村みゆき『宮沢賢治を創った男たち』青弓社、2003年、78-80頁を参照。
- 11) ルカによる福音書。新約聖書翻訳委員会訳『新約聖書』岩波書店、2004年、230頁。
- 12) 中野新治『宮沢賢治・童話の読解』翰林書房、1993年、69頁。
- 13) 谷川雁『賢治初期童話考』潮出版社、1985年、41頁。
- 14) 原口佳子「『どんぐりと山猫』考 おかしなはがきから」（赤坂憲雄・吉田文憲編『注文の多い料理店』考』（五柳書院、1995年、所収）、60頁。
- 15) たとえば『外套』の有力な人物は、家庭生活に何の不満もないくせに、「友だちづきあいするために一人の女の友だちをもつことをプリリーチエだ〔作法に適っている〕と考え」た。友だちでことがすめばいいのだが、この薄っぺらなプリリーチエに巻き込まれて、アカーキー・アカーキエヴィチは死に追いやられることになる。「プリリーチエ」に関する詳細は、以下の拙稿を参照されたい。「二つのペテルブルグ—『青銅の騎士』から『外套』へ」（『むうぎ』第6号、ロシア・ソヴェート文学研究会、1987年12月）。
- 16) たとえば、トルストイは『青年時代』第31章で、「コムイルフォー」は「教育と社会がわたしに植えつけた、わたしの生涯においてももっとも有害な虚偽の観念のひとつだ」とし、「この特質を獲得するために、16歳という人生で最高、最良の時代をどれほど浪費してしまったかを考えると、ぞっとする」と記している（См.: Толстой Л.Н. Полн. собр. соч. в 22 томах. Т.1. «Худож.лит.», Л., 1978. Стр.285-286.）。
- 17) 安藤恭子『宮沢賢治 <力>への構造』朝文社、1996年、90-92頁。
- 18) 原口佳子「『どんぐりと山猫』考 おかしなはがきから」、56頁。
- 19) 萬田務「宮沢賢治『どんぐりと山猫』解析 童話集『注文の多い料理店』研究（1）」（『京都橘女子大学研究紀要』19、1992年12月）、21頁。
- 20) 同上。
- 21) 中野新治『宮沢賢治・童話の読解』、70頁を参照。
- 22) См.: Достоевский Ф. М. Полн. собр. соч. в 30 томах. Т.14. «Наука». Л., 1976. Стр.289.

※賢治作品からの引用はすべて、筑摩書房版『新校本宮沢賢治全集』に拠る（ただし、ルビに関してはこの限りではない。また明らかに誤植と分かるものは訂正して引用した）。